第３章　身近な公園の再生に向けての着眼点

この章では、第２章で明らかになった公園及び公園を取り巻く都市環境における課題を踏まえ、身近な公園の再生に向けての着眼点についてまとめます。

①市民の活力を活かして画一化からの脱却を

■　これまでの専門家主導による画一化された公園づくりが問題視されています。この画一化を脱するためには、これまでの公園づくりの発想を転換する必要があります。

公園の専門家は、あくまでも「つくる側のプロ」であって、「使う側のプロ」ではありません。例えば、子どもたちが描き出す公園像は、「つくる側」では発想できない創造性豊かなアイデアがあふれています。使う側のプロは、市民であり、子どもたちと言えます。

―小学生が描く「こんな公園が欲しい」―

このような視点から、今後は、「つくる側の視点」による公園づくりから、「使う側の視点」による公園づくり、すなわち、「市民が主役」となる公園づくりに発想を転換する必要があります。それは、公園を管理運営する場合にも同様です。

さらに、公園の画一化から脱却し、市民の望む公園へと再生させるためには、単にハード面だけでなく、地域の特性や市民の意向といったソフト面も反映されたものでなければなりません。そのためには、地域の状況や主役である市民の意向を十分に反映できる公園、すなわち公園をかたちづくるプロセスが重視されなければなりません。そして、市民自身が主役であることの自覚が必要です。

②市民が主体となって“自分たちの公園”の再生を

■　公園が地域にとって“身近な存在”として位置づけられるためには、公園を地域共有の自由空間としてとらえ直し、「公園は自分たちのもの」という意識を持つことが重要です。そのためには公園の計画づくりの段階から実際に再生する段階までの間、市民が主体となって取り組み、“自分たちで考え、再生させた公園”という達成感を共有することが大切です。それは、管理運営についても同様です。

　また、そのことは、空き缶やごみの散乱・犬のフンの不始末に対するマナーの向上にもつながります。

③多様なニーズには市民のオープンな話し合いで

■　多様な活動を公園で展開するには、限られた空間を、多様化する市民ニーズを反映するよう上手に使いこなすことが大切です。それを可能にするには利用者である市民の誰もが参加できるオープンな話し合いの場で互いに譲り合い、調整していくことが必要です。そして、その作業には相当の手数と時間を要することを関係者が十分認識しておくことが必要です。

④市民のニーズの変化に柔軟に対応できる公園

■　公園をとりまく地域社会は、時間の経過とともに人口、年齢構成、あるいは生活環境などが変わってきており、それに伴って公園に対するニーズも当然変化していきます。

　したがって、公園も市民のニーズの変化に柔軟に対応し変わっていくことが必要です。

⑤地域コミュニティの場となる公園

■　身近な公園は、子どもたちにとって安全で、のびのび遊べる空間でなければなりません。

　そこで子どもたちがいきいきと過ごすためには、大人が子どもたちを暖かく見守る状況や大人も子どもたちと一緒になっていきいきと楽しむ状況を生み出すことが望まれます。

　特に、今後増え続ける高齢者と地域の子どもたち、その保護者と高齢者との結びつきを一層強め、身近な公園を子どもたちだけの専用施設としてではなく、

地域のコミュニティを育(はぐく)む地域の施設としての位置づけが必要です。

さらに、公園においてコミュニティが育(はぐく)まれるためには、公園は地域共有の自由空間であるとの認識のもと、身近な公園の再生や公園イベントに市民自身が主体的にかかわることが不可欠であり、地域の共有意識を高めるための仕組みづくりが必要です。

現在、市民による管理体制が「街区公園清掃等報奨金制度」の形で浸透されつつありますが、清掃、除草などの維持管理だけではなく、地域行事の開催など利用運営にも積極的に取り組める組織として徐々に変わっていくことが望まれます。また、行政ではそうした市民の積極的な活動を支援する体制を整えておく必要があります。

⑥自然豊かな公園

都市化の進展とともに、身近な空間から自然とふれあえる場が減少する中で、公園には、土の地面があり、野草が生え、昆虫や野鳥が集まるなど、公園は都市の中で自然を感じることができる貴重な空間です。

さらに、自然とのふれあいを強め、公園での活動の可能性を広げるためには、様々な草花、池などの水辺、原っぱなどの空間の広がり、樹木による緑陰といった自然の要素を最大限に活用する必要があります。

⑦防犯に配慮した公園

都市計画の専門家からは、まちなかの死角において子どもは犯罪にあいやすいとの指摘があります。今後、我が国の安全性が危うくなりつつある今、防犯の視点を取り入れ、公園の機能性や快適性を損なうことなく防犯性を高めていく必要があります。

同時に、ソフト面での取り組みとして、地域の安全活動を広げていくことも重要です。

地域による公園の自主管理など、常に公園を見守ることができる人たちがいて、その目が行き届いている公園では、犯罪が起きにくいとされていることから、地域の人たちに、暖かく見守られる公園とする必要があります。